

# 作品との出会いを自分の言葉で語る高校生

— コミュニケーション力の育みと創造性 —

愛知県立愛知工業高等学校

デザイン科 竹内 千恵

## 1 はじめに

デザイン科の生徒の多くは自分の意見を人に上手に伝えたり、他者の考えを聞いて、そこに自分の考えを持ち、意見交換をしてさらに思考を深めたりすることが苦手である。特に工業科の生徒は授業において、指示されたことはしっかり取り組むが、自ら問題を見つけて、適切な言語活動によって発信し、他者と意見交換しながら解決策を求めていく機会は少ない。このことは、近年、普通科の生徒についても状況は同様で、上級学校に進学してもそのほとんどが、教官からの指示を待ち、自ら動こうとしないという傾向がある。この体質は、日本文化の特徴で、「職人技は教えないから、勝手に盗め」や「言わなくても心を察する、奥ゆかしいことが美德」といった考え方がベースにあることは否めないが、これでは国際社会で通用することはおろか、自分のクラスの中での立ち位置が見つけられず、集団の中で穏やかに生活できない若者も増えているのが実情である。そこで、デザイン科の生徒に対して、美術館の作品鑑賞の機会を活用して、活発にディスカッションをし、コミュニケーション力を養いながら、創造性を育む機会を持っている。こうしたコミュニケーション能力向上への取り組みについて報告する。

## 2 鑑賞学習の実際

### (1) 本校の立地や生徒の状況

本校は、愛知県の情報発信の中心とも言える、名古屋市の中心部である栄に近く、愛知県美術館や名古屋市美術館、その他ギャラリーが身近で、生徒が容易に足を運ぶことができる。また、インターネットやSNS等の普及によって、生徒はアート、デザインに関する様々な情報を簡単に入手し、互いに情報交換をしている。そのため、普段から教員もそれらの情報を掴み、生徒の興味関心事や社会で話題になっているものに、積極的に触れていなければ生徒理解が進まない。

### (2) 美術館との連携

あらかじめ、受け入れ側の美術館学芸員との打ち合わせが必要であるが、愛知県美術館では鑑賞学習プログラムという児童、生徒向けの企画を行っており、その企画を活用して連携している。また、名古屋市美術館や岐阜県美術館なども同様の企画を持っているので連絡をすれば対応してくれる。展示企画の始まりから関わることもあって、高校生に適切な展覧会选择しながら進めている。また準備においては学芸員側の狙いと学校側の目指すことに違いがあるので、深く意見交換を行い調整する必要がある。

### (3) ディスカッションまでの流れ

#### ① 広報とギャラリートーク者募集による動機付け

展覧会の情報プリントを配布する。他者の前でギャラリートークをしてみたい生徒とそのトークを聞いてディスカッションに参加したい生徒に別れて、それぞれ事前の意見交換をさせておく。ギャラリートーク者はどの作品で何を話すか考えておく。また、あいちトリエンナーレのような大規模展示は鑑賞し、すぐにディスカッションをするので、事前に展覧会を観ておくことを勧める。

#### ② 当日

開館の時間に現地の美術館に集合し受付を通り、本日の流れを聞く。他校の生徒と出会うなかで自由な自分を発揮できるようあらかじめ、同じ学校の生徒とは班が別れるようにしておく。午前中

に鑑賞し、午後再び集合してディスカッションやワークショップに参加し、意見交換をする。この時、人の意見は最後まで聞くことや、他者の意見は否定しないことなどを事前に確認しておく。最後にまとめの時間を持ち、共通意見や、自分とは別の意見があったことなどを確認し、他者の考え方が様々であることを認識させる。また、自分の意見が他者に受け入れられたことを実感することも重要であり、満足感や充実感を十分に味あわせることに心掛けている。

### 3 鑑賞学習で得られること

鑑賞学習で得られることは、ふたつある。

ひとつは、古典、現代のアートやデザインの本物に直接触れることで感性を磨く。若く感化されやすい時期の生徒に知的文化的欲求を満たし、今後のデザイン活動のより所になるような心の引き出しを豊かにしていくことである。

もうひとつは、自分の中に生まれた感覚、感情、想いを言葉にして発信し、他者と擦り合わせてみることでコミュニケーション力を磨き思考を深める。答えが幾通りもある鑑賞行為の中で発見、疑問点を探り、自らにとっての解を導き出して行く作業である。自分にはなかった発想を知り得たり、新しい価値を発見していくことでもある。



### 4 まとめ

「意見を言って終わりではなく、意見が発展していくことが楽しかった。」「自分の意見に共感してもらい気づきを与えることができる機会だった。」「自分の考えを人と共有するのは楽しい。」「同じ作品でも人によって捉え方が違った。」「私も自分の思いを素直に表せるようになりたい。」これらが参加生徒の感想である。こうした取り組みの中から文科省の官民協働海外留学支援制度、「飛びたて、留学 JAPAN 日本代表プログラム」に3名が挑戦してうち1名が選考を通過した。この夏休みに米国を訪れている。将来の夢を自分の言葉で語りプレゼンテーションが成功した事例である。

コミュニケーション力というのは、クラスの中で仲間と盛り上がり話ができることではない。初めて出会った人と意見を交わし、相手の言うことを良く理解し自分の考えもしっかりと伝えて互いを認め合いながら内容を深められる力のことである。とりわけデザイナーを志す生徒には不可欠な能力と考える。しかし、実際にはデザイン教育の現場においてこの点への指導が少ないと感じる。今、どんな教育プログラムが必要かデザイン教育研究会に引き続き提案し、さらに深く展開させていきたい。